
全ての子どもが未来を創る体育学習

－自らの学びを創る体育学習における教師の手立て－

1 研究について

(1) 研究主題

小学校学習指導要領解説体育編では、生涯にわたって運動やスポーツに親しみ、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成が、体育科の目標として示されている。その実現に向けては、運動技能の習得にとどまらず、運動やスポーツの楽しさや価値を実感しながら、主体的に学びに向かい、仲間と関わり合いながら学び続けようとする態度を育むことが重要である。

また、令和4年に策定された第3期スポーツ基本計画では、スポーツを「つくる／はぐくむ」「ともにいき、つながりを感じる」「誰もがアクセスできる」という三つの視点が示されている。これらは、全ての人々がスポーツに参加し続けられる社会の実現を目指すものであり、学校体育においても、全ての子どもが学習に参加し、それぞれのよさを生かしながら学ぶ「共生」の視点が一層求められていることを示している。

香川県においては、これまで一貫して、全ての子どもが体育の学習に主体的に関わり、仲間とともに学び合いながら、運動の楽しさや価値を実感できる授業づくりに取り組んできた。その中で、子どもの「できる・わかるようになりたい」という思いから、子どもが自ら課題を見だし、仲間と関わりながら学習を進めていく姿が大切にされてきた。子どもの課題に応じた多様な練習環境の設定や、スモールステップによる単元構成、振り返りシートやタブレットを活用した自己評価の工夫により、子どもが自ら課題を見だし、仲間と学び合いながら主体的に取り組む姿が見られた。これらの取組は、全ての子どもが運動の楽しさや価値を実感する授業づくりを支える成果となった。

しかしその一方で、活動が活発に行われているものの、思考の焦点が定まらず学びの深まりにつながらない場面や、課題が適切でなく練習方法が教師主導で決まる場面、振り返りが次の学習に十分に生かされていない場面も見られた。すなわち、学習過程の中で子ども自身が自らの学びを振り返り、課題や解決方法、仲間との関わり方を見直しながら学習を進めていく姿については、さらなる充実の余地があると考えられる。

これらの成果と課題を踏まえ、研究主題を「全ての子どもが未来を創る体育学習」とした。

本研究における「全ての子ども」とは、運動やスポーツが得意な子どもに限らず、苦手意識をもつ子どもや特別な配慮を必要とする子どもを含む、目の前にいる一人一人の子どもを指している。それぞれの子どもが、自分なりの課題を見だし、仲間と関わりながら学習を進める中で、「できた」「わかった」という実感を積み重ねていくことが、次の学びへの意欲につながると考える。

また、「未来を創る」とは、子どもが体育の学習を通して、運動やスポーツの価値を実感し、豊かなスポーツライフの実現に向けて必要な資質・能力を身に付けていくことである。その過程において、運動領域では理想の動きを思い描きながら自己の課題に向き合い、試行錯誤を重ねる姿が、保健領域では理想の生活場面を思い描きながら自己の生活を見つめ、よりよい在り方を追求する姿が大切であると捉えている。

このような姿を育むためには、一単位時間や単元を通じた学習の中で、子どもが仲間と関わりながら学習を進め、自らの学びを振り返り、次の学習へとつなげていく過程を重視することが重要である。本研究では、こうした学習過程を通して、全ての子どもが自分なりの成長を実感できる体育学習の実現を目指していく。

(2) 未来を創る子どもとは

本研究では、体育科の学習を通して育成したい「未来を創る子ども」を次のように捉える。

理想とする動きや生活場面を思い描き、自己の実態を見つめながら課題を捉え、よりよい課題解決の方法を選んだり工夫したりして、仲間と協働しながら課題解決に向かい、その過程を通して自分の成長を実感し、次の課題に向かってさらに学び続けようとする子ども。

このような子どもを育成していくためには、学習の各場面において、自らの学びを振り返り、課題や方法を見直しながら学びを深めていく経験を積み重ねていくことが必要である。学習を通して得られた「できた」「わかった」という実感が、次の学びへの意欲につながっていきと考える。

本研究においては、体育科の学習を通して表れる「未来を創る子どもの姿」を、次のように想定している。

運動領域においては、理想の動きを思い描きながら自らの課題に向き合い、これまでの学習経験や生活経験と結び付けて試行錯誤を重ねる中で、運動への認識を深めていく姿

保健領域においては、理想の生活場面を思い描きながら自己の生活を見つめ、自らの課題を捉え、よりよい生活に近づくための方法を選び、実践を重ねる中で、自己の生活への認識を深めていく姿

(3) 副主題について

本研究では、研究主題に示した「全ての子どもが未来を創る」を、体育学習の場面においてどのように具体化していくかを明らかにすることをねらいとしている。授業の中で、子どもが課題に向き合い、試行錯誤を重ねながら学びを深めていく姿は、運動やスポーツの価値を実感し、生涯にわたって豊かなスポーツライフを築いていくための基盤となる。そのような学びを体育学習の中で生み出していくためには、教師の意図的な手立てが欠かせない。

そこで副主題を「自らの学びを創る体育学習における教師の手立て」と設定し、子どもが自ら学びを進めることができるようにするための教師の手立てに着目していく。

本研究において、「自らの学びを創る姿」とは、学習過程の各場面において、仲間と関わりながら学習課題を捉え、自己の学習状況を踏まえて課題解決に向けた方法を選び、試行錯誤を重ねつつ学習を進め、振り返りを通して次の学習へとつなげていく姿である。

この過程では、課題や解決方法を考えるだけでなく、体の使い方や仲間との関わり方を状況に応じて工夫しながら、実際の運動や活動を通して学びを深めていくことが求められる。そうした営みは、運動技能の向上や学習内容の理解と密接に結び付いている。体育学習において、このような学びの進め方を大切にすることは、運動が得意な子どもだけでなく、苦手意識をもつ子どもや特別な配慮を必要とする子どもを含め、学級の全ての子どもが、それぞれの実態に応じて「できた」「わかった」という実感をもつことにつながる。また、その成果を仲間と共有し、互いに支え合いながら学習を進めていく姿を重視したいと考える。

ここでいう「できる」とは、運動ができるようになったり、より上手になったりすることであり、「わかる」とは、動き方のポイントや運動の特性、自己や仲間の課題、課題解決の方法などを理解することである。体育学習では、この「できる」と「わかる」が学習の過程の中で相互に関わり合いながら高まっていくものと捉える。

また、現行の学習指導要領では、体育科で育成を目指す資質・能力が、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理されている。本研究では、子どもが自ら学びを進めていく学習の在り方を、これら三つの資質・能力を横断的に育む上で重要な視点として位置付ける。

そして、学習を通して得られた「できる」「わかる」という成果や成長の実感が、次の課題への取り組みにつながり、学びを広げていく体育学習の実現を、本研究のねらいとする。

2 研究の具体について

本研究では、学習過程の各場面において、子どもが自らの学びを創る姿を支えるために、教師がどのような意図をもって手立てを行うことが重要であることを明らかにすることをねらいとしている。

そのため、研究の具体においては、体育学習における学習過程を「見通し・行動・振り返り」の三つの局面に整理し、これらの局面を往還する中で、教師の手立てが子どもの学びにどのような影響を与えているのかを捉えていくこととした。なお、三つの局面そのものを設定することを目的とするのではなく、学習過程の各場面における教師の意図的な手立てに研究の視点を当てる。

本研究では、「できる」と「わかる」をどちらかが先行するものとして捉えるのではなく、学習の過程の中で相互に影響し合いながら高まっていく関係として捉える。運動を試す中で「できた」「できなかった」という経験から課題に気付き理解を深めていくこともあれば、動き方のポイントが分かることで、試行錯誤を通して「できる」ようになっていくこともある。このように、「できる」と「わかる」が行きつ戻りつしながら高まっていく学びを、体育学習の中核として捉えたいと考える。

そして、学習過程の中で、教師の手立てによって子どもが課題や解決方法、仲間との関わり方、自分の状態を捉え直しながら学びを前に進めていくことで、一人一人が「できる」「わかる」という確かな実感を積み重ねていく体育学習の実現を目指す。

(1) 見通し局面における手立て

＜自らの目標に向けて解決すべき課題を見いだす姿＞

見通し局面では、教師が、子ども一人一人が「何をできるようにになりたいのか」「何が分かるようにになりたいのか」といった学習課題を見いだせるよう、教材・教具や資料の提示の仕方を工夫することを大切にしている。その際、子どもが運動の楽しさや価値を感じながら、自己の実態と理想とを比べ、解決したい課題に気付くことができるよう手立てを行う。

具体的には、活動の様子や記録、データ、映像などを意図的に提示することで、子どもが自分たちの認識と実際の姿との間にある「ずれ」に気付き、必要感をもって課題を捉えられるようにしている。

さらに、課題を見いだすことにとどまらず、「どのような方法で解決していくのか」という見通しをもてるようにすることが重要である。課題解決に向けた方法を選択したり、試してみたい視点を意識したりすることができる場を設定することで、次の行動局面において、何を目標として活動していくのかが明確になる。

第4学年ゴール型の実践では、単元の初めに守りが動ける範囲を制限したゲームを設定し、シュートして得点する楽しさやパスの必要性を実感できるようにした。その結果、「もっと得点したい」という思いが高まり、「より多く得点してクラスマッチで勝つ」という目標を設定した。試合の様子やデータを提示することで、守りを突破するにはボールを持たない人の動きの重要だと気付いた子どもたちは、「より得点に繋がりそうな動きを選ぶ」という視点をを用いて、チームや自分に適した課題（作戦や動き）を設定し、仲間と相談しながら練習方法を選択した。

第5学年陸上運動（走り高跳び）では、授業の初めに「今年こそは西組に勝ちたい」という単元目標を確認し、本時は記録を伸ばすための練習に取り組むことを共有した。前時の振り返りと試技の動画を基に個人課題を設定し、助走・踏み切り・空中姿勢・着地の4つの練習場から、自分の課題に合う場を選んで練習する見通しをもたせた。また、課題解決の際には、モデル図のポイントを参考にしたり、困ったときはアドバイザーに相談したりするとよいことを確認し、上手いきそうなタイミングで試しのジャンプに挑戦できることも共通理解した。

(2) 行動局面における手立て

＜仲間と関わりながら試行錯誤を重ね、課題解決に向かう姿＞

行動局面では、教師が、子どもたちが見通し局面で捉えた課題の解決に向けて、仲間と関わりながら活動に取り組み、試行錯誤を重ねていけるよう支える。

教師は、子どもたちが「何のために活動しているのか」「何を目指して取り組んでいるのか」を意識し続けられるよう、問い返しや声掛けを行うとともに、課題解決の視点を共有する。また、必要に応じて個別に助言を行うことで、試行錯誤が見当違いの方向に進むことなく、子ども自身が学びを前に進めていけるようにする。

この局面では、「やってみて分かること」と「分かったことを基に再び試すこと」を往還する活動が繰り返される。教師は、子どもが自ら発見した視点や工夫を学習の中で共有し、それらが課題解決にどのようにつながっているのかを確かめられるようにする。こうした手立てによって、子どもは、自分たちで課題解決の視点を活用しながら学習を進めていくようになる。

その際、教師が一方的に視点を示して押し付けるのではなく、子どもたちが必要感をもって視点を見だし、仲間と共有しながら獲得していく過程を大切にしたい。

第2学年マットを使つての運動遊びでは、マットの長さを変えて回数を調整できる場、火に当たらないように向きを変える場、高さや距離に挑戦できる場、山や谷で速さを変える場、川の幅や石の位置を変えて跳ぶ大きさを調整できる場などを設定した。遊びを工夫する視点として、数・向き・速さ・高さといったポイントを共有したことで、遊びの中で意識できるようにした。また、どの場にどれだけ挑戦したかを自分で把握できるように、挑戦した場の色の輪ゴムを手首に付けるようにした。友達の輪ゴムの色や数を見ることで、「一緒にやってみよう」「どうやったらうまくいくの」といった関わりが自然に生まれた。その中で、子どもたちは、全体で共有した「両手の着き方や位置」「頭の着き方」「腰の高さ」「目線」といった「うまくいくコツ」を伝え合う姿が見られた。友達の工夫を参考にしながら挑戦の幅を広げ、より楽しく活動できるようになったり、これまで取り組んでいなかった場にも挑戦できるようになったりした。教師も、子どもの活動を見取り、どんな遊びをどうすれば楽しく遊べたか、声かけを行った。

第6学年ボール運動ゴール型の実践では、課題解決に必要なと思う練習方法をチームで選択した後、タスクゲーム(選んだ作戦の動きを試す場)、ドリルゲーム(パスやキャッチ、ランニングパスなどの基礎的な動きの練習の場)、作戦会議(次に試す動きを共通理解する場)をローテーションしながら練習に取り組んだ。その際に、黒板にどのチームがどの作戦を試しているかを掲示しておき、必要に応じて他のチームの練習の様子を見学できるようにした。教師は、タスクゲーム・ドリルゲーム中にワンプレーごとに目指す動きに向けた話し合いをし、動きを修正しているチームの価値付けを行い、全体で共有した。

(3) 振り返り局面における手立て

<学習の成果や課題を捉え、次の学びにつなげていく姿>

振り返り局面では、教師が、子ども一人一人が一単位時間や単元を通して得た成果や残された課題を捉え、次の学習につなげていけるよう、振り返りの視点や対話の場を意図的に設定する。

教師は、学習のねらいに沿った視点を示したり、仲間との対話を通して学びを言語化したりすることで、子どもが自らの学びを整理しやすくなるよう支援する。その際、活動を通して得られた感覚や仲間との関わりを手がかりにしながら、どのような工夫や判断が課題解決につながったのかを振り返らせることが重要である。

また、教師が振り返りに求める具体的な姿をあらかじめ明確にしておくことで、学習過程の各局面における手立てに一貫性が生まれる。学級全体で成果や課題を共有し、課題解決の過程を価値付けることは、子どもが自分の成長を実感し、次の学習への見通しをもつことにつながる。

このように、振り返り局面は、学んだ成果を共有する場であるとともに、次の学びへとつなげていくための重要な機会である。教師の意図的な手立てを通して、全ての子どもが自分なりの成長を実感できる体育学習を実現していきたい。

第6学年陸上運動では、本時の課題に対する「できた・分かったこと」とその理由(よかった取り組み方)という視点を提示し、子どもたちが自分の学びを振り返ることができるようにした。その際、記録や自分の位置を記したカードなど、振り返りの手掛かりとなる資料使えるようにしており、繰り返すことで、必要だと思った子どもたちは自ら活用するようになっている。また、一緒に取り組んだグループで嬉しかったことを伝え合う時間を設け、「友達の助言でタイミングに気付いた」など、仲間と学び合うよさに気付けるようにしたり、課題解決に繋がる学び合いのよい例を取り上げたりした。

全ての子どもが未来を創る体育学習
-自らの学びを創る体育学習における教師の手立て-

資質・能力



自らの学びを創る姿

見通し局面

- ・ 解決すべき課題を見いだす
- ・ 課題解決の見通しをもつ

行動局面

- ・ 様々な方法で粘り強く課題解決を目指す
- ・ 他者と適切に関わりながら課題解決を目指す

振り返り局面

- ・ 自らの学びを正確に捉える
- ・ 今後の学習や生活に生かそうとする

- ・ 目標達成への意欲を高める

手立て

資質・能力



土台

スモールステップの成功体験を保障するための単元構成の工夫

目指す子どもの姿を具体化

教材・教具の設定

子どもの実態把握

学習内容の明確化